

社会的知識創造を行う環境に関する研究

－フューチャーセッションを事例に－

渡辺 修司*1 ○岩根 利果*2

松本 裕司*3 仲 隆介*4

キーワード：知的創造 フューチャーセッション インタビュー調査
環境要素 環境評価 ワークプレイス

1. 研究の背景と目的

現在、ナレッジワーカーと呼ばれる職業従事者は増加している一方で、2011年の東日本大震災以降、知識創造に求められるものが変化してきていると考えられる。組織には、従来よりも社会性を内包して知識創造を行うこと、社会的知識創造が求められ、企業の枠を超えた社外との結びつきが、今後より重要になってくると考えられる。

こういった状況の中、企業は、社内に「フューチャーセンター」(以下、FC)を設ける事例が見られる。FCとは、欧州で始まった組織(企業、政府、自治体など)が未来に関わる戦略・制作の実践を目的に据え、当事者やステークホルダーが対話を通じて解決手段や新たなアイデアを発見・共有し、相互協力の下で実践するために設ける場である^{[1][2]}。日本におけるFCの特徴としては、欧州のFCが行政主導のもとに始まったのに対し、日本においては企業、産官学の連携によるものが多い^[3]。また、欧州の多くのFCは特定の施設を所有しているのに対し、日本の場合は様々な場で行われることが多いという点も特徴としてあげられる。

FCに関する研究において、環境とその生産性・創造性に関する研究^[4]では色彩による効果には言及されているが、更なる研究として、空間の効果についての詳細な分析を行う必要があると思われる。

本研究では、FCで行われる活動、「フューチャーセッション」(以下、FS)を、『社会性を内包して知識創造を行う実践事例』として捉え、FSの環境と行動の関係性を整理し、社会的知識創造を行う環境の要件を明らかにすることを目的とした。

2. インタビュー調査をもとにした仮説導出

2.1 調査概要

FSにおける環境の価値を把握するために、FSを行うことを日常業務としているワーカー3名(セッション設計者2名、ファシリテーター1名)に対して半構造化インタビュー(40~100分/人)を行った(2012年8月18、19日)。主な質問内容を以下に示す。

- ・今回実施するFSの目的や意識
- ・これまでに行ってきたFSで起こった参加者の理想的な行動
- ・自身の役割と行動
- ・参加者に期待する行動
- ・それらを誘発する行動
- ・FSにおける問題点
- ・セッション設計者、セッションファシリテーターとして考える環境の効用

また、インタビュー調査と同期間において、インタビュー対象者主催のFSの観察調査も行った。観察調査では、ビデオ撮影を行い、参加者の特徴的な行動を記録した。

2.2 インタビュー調査、観察調査の基礎的な分析結果

調査結果から、FSにおける重要度の高い項目「FSに求められる環境の要素」「セッション参加者に求められる意識、行動」「セッションの達成すべき目的」を抽出した。それぞれの項目の定義を表1に示す。

2.3 仮説的概念モデルの導出

抽出したFS項目の関係性を示した仮説的概念モデルを図1に示す。最下層のFS環境項目からFS意識項目、FS行動項目、さらにはFS目的項目に向けて影響を与えるという仮説を立てた。

表 1 FS の重要項目

	項目名	定義
FS 環境項目	外部連続性	内と外の境界が曖昧な空間であること
	テーマとのマッチング	テーマに密着した空間であること
	行動許容性	参加者が思うように振る舞うことが許容された空間であること
	非日常性	日常とは切り離された許容された空間であること
	安心・安全性	セッションを行うにあたって参加者が安心して発言できる環境であること
FS 意識項目	自己開示	セッションの内容に有益であるか否かに関わらず、自分の感情、考えをありのままに伝えること
	内省	表層からではなく、深くから考えたり、他人を通して自分を知らること
	一体感	セッション参加者が体験、価値を共感し、仲間意識を持つこと
FS 行動項目	個々の主体性	自分の意志に沿って行動をとること
	チームワーク	セッション参加者がお互いに協力して成果をあげようと行動すること
FS 目的項目	活動の積み重ね	セッションが終わっても、価値を生み出すために活動を継続して行うこと
	継続的な取り組み	主体性を持った参加者が次に繋がるアクションを起こすこと

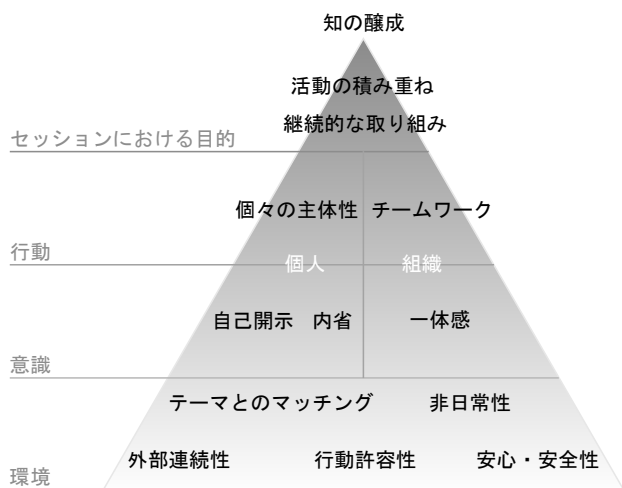


図 1 FS の目的達成に関わる環境、意識、行動の関係モデル

2.3 仮説的概念モデルをもとにした調査設計

環境の要素が FS の目的達成に与える影響を明らかにするために、導出した仮説的概念モデルをもとに調査設計を行う。

物理的環境の評価とセッション参加者に対して各項目 5 段階評価アンケートの 2 種類を行った。環境の印象に関する形容詞対はワークプレイスに関する研究

表 2 物理的環境の評価項目

項目名	説明
実質使用スペース[m ²]	セッションにおいて、主に使用されているスペースの面積
全体スペース[m ²]	セッション中に参加者がアクセスできるスペースすべてを含めた面積
人当実質使用スペース[m ² /人]	セッション参加者 1 人当たりの実質使用スペース
人当全体スペース[m ² /人]	セッション参加者 1 人当たりのスペース
天井高[m]	実質使用スペースの天井高
植栽密度[点/m ²]	[(点数(床置 2 点、机置 1 点))/m ²]
窓面積率[%]	(窓有効面積/セッション会場面積)

に携わる筆者が所属する研究室の学生、教員とのブレインストーミングにより 16 項目を選定した。物理的環境の評価項目を表 2 に、アンケートの設問を表 3 に示す。

表 3 アンケートの設問内容

セッション参加者の属性	
性別、年齢、業種、テーマとの関連、FS の参加経験数、本会場での参加経験、別会場での参加経験	
環境の項目とその設問	
外部連続性	物理的環境評価項目、セッション会場の窓面積率 より考察
テーマとのマッチング	Q2-3. 今回のセッションで話し合ったテーマとマッチしている環境である
行動許容性	物理的環境評価項目、セッション会場の面積 より考察
非日常性	形容詞対 (日常的な - 非日常的な)
安心・安全性	Q2-4. 安心してセッションに参加できる環境である
意識の項目とその設問	
自己開示	Q3-1. 自分のもつ情報や事実を明らかにしたか Q3-2. 自分の感情を表に出したか Q3-3. 自分の考えを相手に伝えたか
内省	Q3-6. 他の参加者を通して、自分を省みることはあったか Q3-8. 表層からではなく、深く考えることはあったか
一体感	Q3-4. 他の参加者と価値を共有できたか Q3-5. 他の参加者とともプロセスから参加できた感じはあるか Q3-17. 他のセッション参加者と一体感をもつことができたか
行動の項目とその設問	
個々の主体性	Q3-16. 主体性を持ってセッションに参加できたか
チームワーク	Q3-7. チームワークを上手くとることができたか
セッションにおける目的項目	
活動の積み重ね	Q3-14. 今後、このセッションが続けば、もっとアイデアが発展しそうだという感触はあるか
継続的な取り組み	Q3-13. 機会があれば、今後も参加したいと思うか Q15. 他のセッション参加者とこれからも関係性を持ち続けたいと思うか
その他の設問	
環境の印象	形容詞対 (詳細は図 2 に記述)
その他	Q2-1. 居心地の良い環境である Q2-2. 今回のセッションに機能的に適した環境である

3. 基礎データと環境の印象に関する分析

以下の条件を満たすワークショップ 6 会場(会場 A ~ F) 9 セッションを対象に、2.3 で示した 2 種類の調査を実施した(表 4)。

- ・主催者が FS であると認識しているワークショップであること
- ・社会性を内包したテーマであること
- ・1つの組織に属するメンバーだけでのセッションでないこと
- ・セッション参加者が 10 名以上であること

表 4 調査対象の 9 つのセッションの概要

セッションタグ (調査日程-会場名)	調査日程	会場名	参加人数
1121-A	2012. 11. 21.	A	16
1124-B	2012. 11. 24.	B	40
1124-C	2012. 11. 24.	C	15
1127-D	2012. 11. 27.	D	25
1202-C	2012. 12. 02.	C	43
1205-D	2012. 12. 05.	D	45
1216-D	2012. 12. 16.	D	36
1218, 19-E	2012. 12. 18, 19.	E	19
1223-F	2012. 12. 23.	F	19

3.1 物理的定量データのグループ化

計測した各会場、セッションの物理的な環境の数値から、天井高高いグループ(以下、G)/低い G、全体面積広い G/中程度 G/狭い G のように、それぞれのデータにて分類を行った。表 5、6 に分類ごとで色分けしたものを示す。

表 5 各物理的環境データの分類

	会場 A	会場 B	会場 C	会場 D	会場 E	会場 F
天井高[m]	5.27	3.1	2.81	2.85	2.38	5.55
実質使用面積[m ²]	90.25	57.76	132.67	334.23	46.34	66.77
全体面積[m ²]	119.66	75.26	307.62	797.96	92.68	106.04
窓面積率[%]	209.2	0	17.9	7.9	19.7	0
植栽密度[点/m ²]	0	0	0.091	0.105	0	0

※ 黒-上位 G 灰-中位 G 白-下位 G

表 6 参加者 1 人当たりの面積データの分類

セッションタグ	1121	1124	1124	1127	1202	1205	1216	1218,19	1223
	-A	-B	-C	-D	-C	-D	-D	-E	-F
1 人当実質使用面積[m ²]	5.64	1.44	8.84	13.37	3.09	7.43	9.28	2.44	3.51
1 人当全体面積[m ²]	7.48	1.88	20.51	31.92	7.15	17.73	22.17	4.88	5.58

3.2 環境の印象に関する分析

アンケートにおける形容詞対設問に対して、会場ごとに平均値を算出した。Kolmogorov-Smirnov の正規性の検定において有意差は見られず、ノンパラメトリック手法を用いた分析を行った。どの設問においても平均値の差に有意差は見られなかったが、知見を見出すべく、会場ごとの環境の印象を示す形容詞対の平均点のグラフを示す(図 2)。

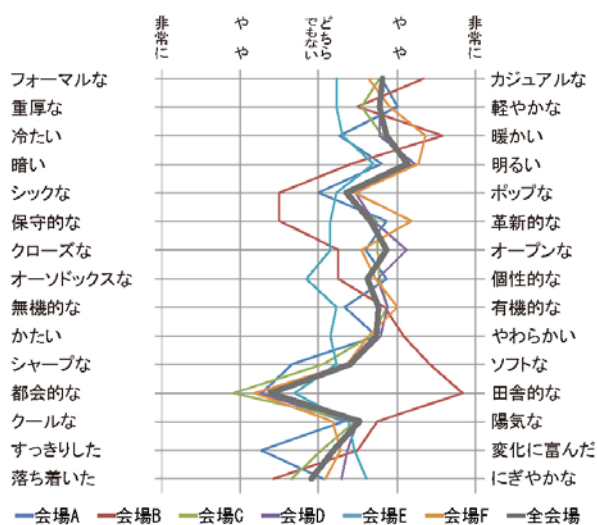


図 2 観居の印象に関する会場ごとの平均点

物理的定量データの分析結果とあわせて考察を行うと、会場 A においては天井高が 2 番目に高く、窓面

積率が 1 番高かったことが、「軽やかな」「すっきりした」環境の印象をセッション参加者に持たせたことに影響を与えたと考える。会場 D においては、面積が広いことが「オープン」な環境の印象を、植栽密度が 1 番高いことが「ポップな」印象を持たせたことに影響を与えたと考える。会場 E においては 1 人当たり面積が 2 番目に低く、人の密度が高いことが「にぎやかな」印象を持たせたことに影響を与えたと考える。また、会場 F においては、天井高が 1 番高かったことが環境に対して「革新的な」印象を持たせたことに影響を与えたのではないかと考える。

3.3 環境印象因子の抽出

形容詞対設問ごとの評定値をもとに因子分析を行った。最尤法を用いて分析を行い、バリマックス回転によって斜交回転をさせた結果、3 因子が抽出された。因子分析結果を表 7 に、抽出された因子を表 8 注 1) に示す。

表 7 FS 会場の環境の印象の因子分析結果

形容詞対	因子 1	因子 2	因子 3
保守的な 革新的な	0.729	0.197	-0.128
オーソックスな 個性的な	0.625	-0.019	0.04
クローズな オープンな	0.619	0.386	0.091
無機的な 有機的な	0.539	0.18	0.298
かたい やわらかい	0.463	0.372	0.393
重厚な 軽やかな	0.128	0.689	-0.011
フォーマルな カジュアルな	0.065	0.662	0.202
冷たい 暖かい	0.297	0.559	0.336
暗い 明るい	0.476	0.553	-0.03
シャープな ソフトな	-0.035	0.404	0.67
都会的な 田舎的な	-0.252	-0.183	0.619
すっきりした 変化に富んだ	0.302	0.092	0.56
クールな 陽気な	0.26	0.378	0.517

表 8 抽出された FS の環境印象因子

因子名 (左から順に因子 1, 2, 3)	斬新性	軽快性	牧歌性
因子寄与率 (%)	35.595	15.171	10.512

4. 環境に関する分析

前章での分析結果をもとに、環境の要素と FS 項目の関係、FS 項目同士の関係を明らかにすることを目的として分析を行う注 2)注 3)。より具体的な知見を得るために、3.3 で抽出した 3 つの環境印象因子ではなく、15 の形容詞対を用いて分析を行った。

4.1 物理的定量データの分類ごとの平均値の比較

分類した定量データグループごとに FS 項目の設問の平均点を算出し、グループ間での比較を行う。Kolmogorov-Smirnov の正規性の検定において有意差は見られず、ノンパラメトリック手法を用いた分析を行った。しかし、どの設問においても平均値の差

に有意差は見られなかったため、参考に、天井高、面積の分類において得られた特徴的な知見を述べる。
天井高での分類による考察

FS 環境項目「安心・安全性」や「居心地性」において、天井高が低いグループの方が、各項目の設問の平均点が高くなった。このことから、普段あまり体験しないと思われる高い天井高を持つ空間よりも、一般的な天井高の空間の方が、セッション参加者にとっても馴染みがあり、安心してセッションに参加できたのではないかと推測する。対して、FS 環境項目「非日常性」に関しては、天井高が高いグループの方が高い平均点を示した。

これらを踏まえて、天井高に関しては、後の分析で行う FS 項目同士の関係の分析において、どちらの FS 環境項目が上位の FS 項目に影響を与えるかを明らかにすることを通して、更なる考察を行う必要がある。

面積での分類による考察

環境項目「テーマとのマッチング」「安心・安全性」「居心地性」「機能性」に共通して、一人当たり面積が「中程度」グループの平均点が高い数値を示した。このことから、一人当たり面積が 6~10 m² 程度の会場でセッションを行うことが、これらの項目を高めることに貢献している可能性があると考えられる。

4.2 環境の印象と FS 項目との相関分析

環境の印象と FS 項目の関係を明らかにするため

に、形容詞対設問回答と FS 項目の設問回答の 2 変量間で相関分析を行った。結果を表 9 に示す。「オープンな」「明るい」は FS 項目 16 設問のうち、12 設問との間に相関を示した。次いで、10 設問と相関を示したのは「個性的な」であり、唯一 FS 目的項目の 3 設問全てと弱いながらも相関を示していることがわかった。強い相関を示すものは見つけることはできなかったものの、FS の環境を作る際に目指すべき環境の印象の一端を示すことができた。

また、「自己開示」において、開示する内容が Q.3-3「考え」から Q.3-1「情報」、Q3-2「感情」へと相関を示す形容詞対の設問数が減る傾向が示された。このことから、同じ FS 項目内の設問であっても、環境が影響を与えることが比較的容易な領域から、難しい領域があることを示唆し、「オープンな」環境の印象は、感情の開示を行うことに若干ながらも貢献できる可能性があることを示した。「内省」においても、Q.3-8 の自己解決できる内省と Q.3-6 の他者を通しての内省で、相関を示す形容詞対の設問数に差があることが示された。

4.3 FS 環境項目と上位 FS 項目との相関分析

FS 環境項目、「居心地性」、「機能性」と FS 意識項目より上層の FS 項目との相関分析結果を見ると(表 9)、かなり弱い相関係数ではあるものの、「非日常性」を除く環境の項目は、複数の FS 上位項目と相関を示した。FS 意識項目、FS 行動項目、FS 目的項目と、FS 環境項目「テーマとのマッチング」「安心・安全性」との間に若干ながらも正の相関関係があることを示した。

表 9 環境の印象、環境項目と FS 項目との相関分析結果(有意差が見られた項目に着色をした)

	FS 環境項目		環境項目		FS 意識項目								FS 行動項目		FS 目的項目				
	テーマとのマッチング	安心・安全性	非日常性	居心地性	機能性	自己開示		内省		一体感		個々の主体性	チームワーク	活動の積み重ね	継続的な取り組み				
	Q.2-3	Q.2-4	形容詞対	Q.2-1	Q.2-2	Q.3-1	Q.3-2	Q.3-3	Q.3-6	Q.3-8	Q.3-4	Q.3-5	Q.3-17	Q.3-16	Q.3-7	Q.3-14	Q.3-13	Q.3-15	
環境印象	フォーマルな - カジュアルな	.308**	.313**	.107	.326**	.208**	.073	.003	-.016	-.065	.057	.085	.053	.069	-.010	.107	.105	.117	.044
	重厚な - 軽やかな	.281**	.292**	.061	.273**	.225**	.106	.080	.089	-.033	.040	.077	.113	.048	.047	.051	.076	.069	.044
	冷たい - 暖かい	.361**	.378**	.018	.437**	.267**	-.086	.083	.098	.081	.121	.138	.130	.133	.131	.143	.259**	.206**	.112
	暗い - 明るい	.418**	.438**	.164*	.419**	.393**	-.198*	.111	.188*	.112	.158*	.173*	.212**	.106	.208**	.293**	.217**	.292**	.135
	シックな - ホップな	.169*	.020	.021	.050	.177*	-.004	.077	-.087	-.053	-.016	.063	.085	-.005	-.100	-.001	.034	.032	.061
	保守的な - 革新的な	.332**	.188*	.136	.252**	.356**	.140	.145	.105	.124	.183*	.213**	.360**	.088	.122	.150	.140	.222**	.145
	クローズな - オープンな	.350**	.278**	.160*	.374**	.436**	.188*	.190*	.206**	.181*	.165*	.137	.239**	.118	.171*	.139	.181*	.232**	.100
	オーソドックスな - 個性的な	.393**	.322**	.249**	.369**	.495**	.139	.079	.090	.072	.145	.222**	.258**	.203**	.098	.226**	.314**	.352**	.238**
	無機質な - 有機的な	.386**	.320**	.128	.300**	.362**	.155	.117	.156*	.115	.162*	.128	.191*	.191*	.152	.247**	.226**	.294**	.150
	かたい - やわらかい	.323**	.294**	.025	.306**	.292**	.027	.108	.060	.099	-.017	.079	.201*	.034	-.020	-.001	.110	.205**	.119
	シャープ - ソフトな	.167*	.267**	-.085	.283**	.092	.042	.118	-.012	.034	-.041	.005	.019	.002	-.011	.149	.060	.064	
	都会的な - 田舎的な	-.086	-.053	-.095	-.071	-.205**	-.015	.078	-.042	-.111	-.080	-.156*	-.237**	-.047	-.086	-.104	.088	-.164*	-.120
	クールな - 陽気な	.176*	.189*	-.164*	.242**	.110	.002	.071	.048	.057	-.030	.036	.037	-.036	-.031	.052	.099	.094	.023
	すっきりした - 変化に富んだ	.179*	.186*	-.019	.147	.196*	.094	.062	.031	.119	.088	.025	.096	.098	-.018	.045	.168*	.063	.087
	落ち着いた - にぎやかな	-.012	-.051	.148	-.088	-.031	.022	.055	.042	.046	.025	-.050	.054	.008	-.007	.038	.009	.070	-.032
FS 意識項目	テーマのマッチング(Q.2-3)	1	.716**	.107	.589**	.747**	.204**	.189*	.168*	.115	.192*	.230**	.275**	.133	.069	.228**	.229**	.265**	.175*
	安心・安全性(Q.2-4)	.716**	1	.080	.616**	.651**	.200*	.174*	.168*	.115	.228**	.223**	.196*	.245**	.113	.306**	.330**	.352**	.292**
	非日常性(形容詞対)	.107	.080	1	.042	.147	.042	.062	.047	.076	.001	.038	-.012	-.036	.030	.059	.001	.037	-.030
FS 行動項目	居心地性(Q.2-1)	.589**	.616**	.042	1	.609**	.116	.119	.161*	.121	.204**	.186*	.254**	.220**	.153	.311**	.312**	.361**	.191*
	機能性(Q.2-2)	.747**	.651**	.147	.609**	1	.158*	.148	.125	.162*	.208**	.204**	.348**	.178*	.120	.257**	.269**	.279**	.183*

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

さらに「テーマとのマッチング」は、FS 意識項目「自己開示」、FS 行動項目「チームワーク」、FS 目的項目「継続的な取り組み」の全設問との間に弱いながらも相関を示し、「安心・安全性」は加えて「一体感」との全設問との間にも、弱い相関関係を示した(有意水準5%)。

「居心地性」や「機能性」も、複数の相関を示したことから、各 FS 項目に刺激を与える可能性がある環境の要素として考えられる。

4.4 重回帰分析

仮説モデルにおいて特に重要であるとしている FS 目的項目に、下位のどの項目が影響を与えているかを明らかにするために FS 目的項目の3設問を従属変数、その他の FS 項目の13設問を独立変数として、重回帰分析を行った。FS 目的項目に影響を与える要因として採用された回数を表10に示す。

結果より、FS 目的項目に影響を与える要因としての採用回数が1番多いのは、FS 環境項目「安心・安全性」であることが示された。4.1における天井高での分類の考察と合わせると、天井高が高すぎない(3~4m前後)ことにより「安心・安全性」が高い環境であり、FS 上位項目に影響を与える可能性を示した。

表 10 独立変数として用いた設問と要因としての採用回数

		独立変数として用いた設問	採用回数
FS 環境項目	テーマとのマッチング	Q2-3. 今回のセッションで話し合ったテーマとマッチしている環境である	0
	非日常性	形容詞対(日常的な - 非日常的)	0
	安心・安全性	Q2-4. 安心してセッションに参加できる環境である	3
FS 意識項目	自己開示	Q3-1. 自分のもつ情報や事実を明らかにしたか	1
		Q3-2. 自分の感情を表に出したか	1
		Q3-3. 自分の考えを相手に伝えたか	0
	内省	Q3-6. 他の参加者を通して、自分を省みることはあったか	0
		Q3-8. 表層からではなく、深く考えることはあったか	1
		Q3-4. 他の参加者と価値を共有できたか	0
一体感	Q3-5. 他の参加者とともプロセスから参加できた感じはあるか	2	
	Q3-17. 他のセッション参加者と一体感をもつことができたか	0	
FS 行動項目	個々の主体性	Q3-16. 主体性を持ってセッションに参加できたか	0
	チームワーク	Q3-7. チームワークを上手くとることができたか	1

5. まとめ

インタビュー、観察調査より FS における重要であると考えられる環境、意識、目的の項目を明らかにした上で、それら FS 項目と物理的定量データ、環境の印象といった環境の要素との関係を明らかにした。これらを通して、本研究では実際に FS を行う環境を

作る際に参考とすることができる知見を得ることができたと考える。

特に、環境の要素としては「安心・安全性」が重要である可能性を示した。さらに「安心・安全性」を高める物理的な環境としては、天井高が高すぎず(3~4m前後)、一人当たり面積は狭すぎないという条件であることが示された。

本研究では、FS を『社会性を内包して知識創造を行う実践事例』として捉え、FS の環境と行動の関係性を明らかにすることを試みた。また、物理的定量データをグループ分類して、平均値の比較をするというアプローチをとったが、今回の調査においては会場のサンプル数が少ない故に有意差が出なかったことから、会場のサンプル数を増やすことが重要であると考えられる。

本研究の成果が、社会的知識創造を行う環境の一側面を示す一助となれば幸いである。今後は FS のテーマ設定やファシリテーターの行動などに着目した研究を行うことで、FS の手法の有効性や創造性に言及していく必要がある

謝辞

第2章でのインタビュー調査と図1.FSの目的達成に関わる環境、意識、行動の関係モデルの作成にあたり、ご協力頂いた富士ゼロックス株式会社・富士ゼロックス株式会社コミュニケーション技術研究所の方々に深く感謝いたします。

補注

注1) 因子の命名は筆者によるものである。

注2) 非日常性、行動許容性に関しては、アンケートの設問では留意せずに、環境の物理的定量データから考察することを想定したため、分析では言及していない。

注3) 「居心地性」、「機能性」は FS 環境項目以外にも環境の要素として追加する必要があると判断し、追加した。

参考文献

- [1] 野中郁次郎, 紺野登: 知識創造経営のプリンシプル; (序章,10章)東洋経済新聞社, 2012.
- [2] 野村恭彦: フューチャーセンターをつくろう; プレジデント社, 2012.
- [3] 堀内一永: フューチャーセンター「未来を創造する対話の場」, 調査季報 vol.170, 2012 3
- [4] LEF future center:LEF: 成功のレシピ, 2009

*1 株式会社内田洋行 修士(工学)

*2 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 博士前期課程

*3 京都工芸繊維大学デザイン経営工学部門・新世代ワークブレイス研究センター 助教 博士(学術)

*4 京都工芸繊維大学デザイン経営工学部門・新世代ワークブレイス研究センター 教授 博士(学術)

A Study on Environment for Social Knowledge Creation -Focus on Future Session-

Shuji WATANABE*¹ ○Rika IWANE*²
Yuji MATSUMOTO*³ Ryusuke NAKA*⁴

Keywords : Knowledge Creation,Future Session,Interview Exploration,
Environmental element,Environmental Evaluation,Workplace

Background and Purpose

In recent phenomenon, the changes in knowledge creation have affects organization to grasp more interest on the social concern. For such situation, the establishment of “Future Center” within the organization can be seen. The study aimed at clarifying the point of Future Session from environmental aspects by handling the activity such as social knowledge creation in Future Center.

Method

First, interview with Future Session’s Planner & Facilitator was conducted. To achieve the objective, the process model was developed as hypothesis and high variable construct was extract from Future Session. Based on hypothesis, the research design was planned by conducting 9 sessions in 6 places.

Conclusion

The analysis focused on environment aspects where the hypothesis was to clarify the relationship between environment and the significant of future session. Furthermore, the multiple linear regression analysis was conducted by making the most valuable construct in the hypothesis as dependent variables. As result, the environmental construct was shown in Social Knowledge Creation for Future Center.

* 1 UCHIDA YOKO CO.,LTD. M.Eng.

* 2 Graduate student, Kyoto Institute of Technology

* 3 Assistant Prof., Dept. of Design Engineering and Management, Kyoto Institute of Technology, Ph. D.

* 4 Prof., Dept. of Design Engineering and Management, Kyoto Institute of Technology, Ph. D.